**ミシェル・ミュラ教授講演会（2010 年 10 月 26 日東北大学）**

ランボーの物語散文：『地獄の季節』プロローグの研究

（『地獄の季節』プロローグの語りとレトリックについて）

**要旨**

プロローグの第一段落から第九段落までの物語 récit（レシ）では、語り手 narrateur /raconteur による**語り narration** は、ギユメ（引用符号――このギユメは閉じられることがない）を開くことによって始まり、生きた経験を口頭で伝えるかたちをとっている。レシは記憶への呼びかけ（第一段落）と夢への言及（第九段落）のあいだにある。一方、「悪魔」が登場する第十段落以降、発話の構造が変わり、**レトリック rhétorique** が問題となる。

**語り**は現在と不可分な複合過去を基本時制としている。第一段落から第九段落までのレシの語りの文体特徴は①単位分割、②対句、③隠喩の三点である。

①各段落はひとつの単位を構成している。第一段落と第二段落のあいだには断絶がある。第二段落は句読法によって三段階に区分される。

②対句の反復では代名動詞が重要な役割を担い、生起する行為の再帰的・自足的次元を強調している。対句は行為項的な構造も統御しているが、第六段落ではねじれが生じ、ヴィルギュルの位置をずらすことでリズムが転調している。

③隠喩は、精神の闘争の激しさを示している。社会的な秩序との分離を示す主体の激烈な行為は、「私の精神」の視点にもとづく隠喩のなかに注がれている。

第一段落で存在した調和は、第二段落で〈美〉への襲撃によって破られてしまう。イデア化した〈美〉を「膝のうえに座らせる」行為には、自己神格化による「子供 - 神」への退行が見られる。同時に苦さの感覚が、深い矛盾の意識となって現れている。ここには、『聖書』と『物の本質について』（ルクレティウス）という二つのテクストへの参照がある。ランボーは「美」と「慈愛」の関係を引き裂きながら、反キリスト教的な見通しの中で「苦い味のする美」を解釈している。矛盾の意識は、〈美〉の大文字性（神聖性）と若い男の「膝のうえに」置かれることのあいだの緊張に由来している。第三段落以降、主体の反逆の行動が継起する。法の支配に対して力の支配が対置され、退行の内面化が準備され、転倒した秩序の構築が暗示される。第七段落以降は、一種のエントロピーの影響を受けて、主体は一種のアケディア（不機嫌）の状態に到達する。

第九段落以降の主要な文体は**レトリック**の文体である。第九段落の「ぼくは夢を見ていた！」の「夢」の範囲確定は難しいが、祝宴と反逆が不可分であることはたしかである。〈サタン〉のレトリックはメッセージの受け手の曖昧さを含んでいる。悪魔の対話が指し示すのはイロニーである。